形見

津木林 洋

仕事から帰ってアパートのドアを開けると、同棲中の彼女が立っていた。

「これ、何」

差し出された握り拳の両側に髪の毛が垂れている。まずいと思ったが顔には出さず、「髪の毛やろ」

「そんなん分かってるわ。何でこんな物があるんかって聞いてんのよ」

それはなあと言いながら彼は部屋に上がった。卓袱台に髪の毛を包んでいた和紙が広げられている。

彼女から髪の毛を受け取り、再び和紙で包むと、原爆に遭^おうた時、瀕死の女学生を見つけたんやと彼は話し始めた。

背中に負^おぶい、急拵えの救護所に運んだが、臭い油を塗るだけの治療で、翌日女学生は息を引き取った。その時、髪の毛を両親に届けてほしいと言われたが、親の居場所が分からないままずっと持ち続けてきたのだ。

「それ、本当の話？」

「嘘やと思うんやったらもうええ。出て行け」

今まで何人もの女がこの髪を見て気持ち悪がり、彼から離れていった。

「俺は、この髪の手入れをせなあかんと思^おうて美容師になったんや。せやからお前と知り合^おうたんも、言うならばこの髪のお蔭^おや」

彼女は美容室の客だった。

「分かった。あんたにとって大事な髪なんや」

数日後、仕事から帰ってきた彼女が、いいことを聞いたわと言った。

「京都に髪の毛を供養してくれる神社があるんやて。今度一緒に行こう」

「突然何や」

「もう私と知り合^おうてんから、あの髪の毛は役目が終わったんよ。だから供養するのよ」

屁理屈のように聞こえるが、うまい反論が出てこない。